

我が授業指導は学生の個性を認めることから ～四方山話～

相模女子大学での12年間・絵本こんなこいるかな・恩師の話…

絵本作家／板絵画家
有賀 忍
(相模女子大学客員教授)

—相模女子大学での12年間・仕事を概観する—

3月をもって相模女子大学での仕事が終わる。人間社会学科で非常勤3年，子ども教育学科は立ち上げから特任5年，その後客員として4年，合わせて12年間学生と相對してきた。仕事には一貫した理念を持って当たった。振り返ってみる。

人間社会学科では学生に絵本創作を指導した。マニュアル世代の若者は問題に答える事は出来ても，何も無い所から考え出したり生み出す事が苦手だ。決められた答えを求めるのではなく，答えは自分が創り出す……自分だけのオリジナルな表現の大切さを理解させた。生きて行くことは自己表現の連続であり，自分なりの美意識，価値観をしっかり持つ事が極めて大事であると繰り返し伝えた。そしてそれを絵本と言う形で表現する。学生は自分に対峙し独力で作り上げていく厳しさを経験する。結果として「自由な心」で表現した，世界に一つだけの絵本が誕生した。学生は生み出した喜び，達成感を覚えたことだろう。

子ども教育学科では，「絵画表現」や「造形表現」を担当した。中でも出色は「実践遊び学」。この他所の大学に類を見ないユニークな科目は，子どもの遊びを真剣に考えるものである。幼児は遊びを通して成長する。学生には幼児理解の上でも大変有要であり，「実践遊び学」を編成科目の目玉と確信し指導にあたった。

「実践遊び学」では廃物利用による創造的造形遊びも提唱し，牛乳パックや自転車タイヤチューブ等廃品を使って遊びの教材や作品を作らせた。廃物を利用するのは，子どもの想像力を培い発想力や応用力を育てたいという狙いからだった。学生は電子ゲーム等市販の完成玩具では得られない“素材活用の面白さ”を体感し，“素材の可能性”を考え創作に活かした。

—指導理念—

学生を指導するにあたっては，

- ①[決められた答えのない世界で自由に表現させる]
- ②[手を止めることなく目一杯作業させ，集中力の効果を認識させる。また時間内に完成させ満足感を味合せる]
- ③[作品を貼付しバインダーに保存させ，自らの分身とも言える制作物を大切に扱う癖を身につけさせる]
- ④[比べない。いい所を見つけて誉める，自信を持たせる]

という考えの下で行った。この中の④について次に詳述する。

—キーワード「比べない。いい所を見つけて誉める。自信を持たせる」—

僕の絵本の代表作に『こんなこいるかな』がある。『こんなこいるかな』はNHKの幼児テレビ番組「おかあさんといっしょ」で1986年放送開始されたアニメーション。一話に性格を強調したキャラクターが一体のみ登場する一分足らずの短いもの。単純な作りで分かり易いこともあってか，子どもの心を捉え断続的な時期を含め20年近く放送された。その制作理念の中に「色々な人がいる。人と人を比べない」がある。

僕は性格を強調したキャラクターを12体創作，絵本は5シリーズ44巻出版した。当時NHK教育番組ス

タッフと大学の先生、出版社の編集長などが集まって2歳児テレビ番組研究会（略して2歳児研）が組織された。2歳児に見せたいアニメーションの開発のため、様々な研究がなされた。尺（一本の時間）はどれくらいが適当か？音声は男性か女性か？声質は？ストーリーは？背景を描くか描かないか？など試行錯誤、デモテープを作り実際に子どもに見せデータを集めて分析、同時にしっかりと教育目標を定めた。

—『こんなこいるかな』2歳児研の教育目標とは—

- ①世の中には色々な人がいることを理解させる。
- ②人にはそれぞれに良さが有ることを理解させる。
- ③行動的特徴ばかりではなく、心理的特徴も理解させる。

上記の三つ、その中の①と②が僕の指導理念と合致するものであった。

「こんなこいるかな」の歌の中に、①②の“色々な人がいて、それぞれに良いところがある”を象徴しているフレーズがある。“♪きみがいるから おもしろい♪”という一節。幼稚園であろうと大学であろうと、この歌詞は通用する。いや、こうでなくてはならない。……比べるのではなく、その人の特徴を掴み発展させる。100人いたら100の個性！1000人いたら1000の輝き！……これが僕の授業に向かう姿勢だ。

絵画制作を続けて四十数年になるが、“比べない”というのは子どもの絵画造形指導をする上での考え方と同然だ。優劣や技の巧拙でものを見ない。オリジナルな自己表現及び個性の尊重、これに尽きる。因みに僕の制作者としての仕事は、自らと向き合い止むに止まれぬ表現欲求を作品化することだが、そこには他者と比べたりする余地はない。肝要なのは、個性と純度だ。



—少年期に擦り込まれた考え方— 忘れ得ぬ恩師 小池正巳先生

学生指導のベースが個性の尊重と書いたが、考え方の根源を遡ると脳裏に小学二年～四年の担任の先生の姿が鮮明に浮かんでくる。我が人生に最大の影響を与えたのが小池正巳先生だ。

先生は絵を描くのが上手だった。写生に出ても生徒を見回り指導することはあまりなかった。ご自身が描くのに忙しかったからだ。実に楽しそう、嬉しそう。「先生っていいなあ」と思った。スケッチは矢立から短い筆を取り出し穂先をナメナメ描くのがあった。矢立という言葉もその時知った。僕には矢立がまるで魔法の道具に思えた。先生は教室でも矢立を使った。筆を洗ったり穂先を整えたりとても大事にされていた。矢立を使う先生が少年の目に凄く格好よく映ったのだろう、僕は先生に憧れたのだった。「小池先生のようにになりたい。僕も絵を描いて行きたい。描いて生きたい」

先生は教室の壁に「よくできました表」を貼った。ドリルや宿題の出来が良い時に自分で○を付けるというもの。僕はあまり成績が芳しくなく、○の数は増えなかった。先生はそれを気にしてか、「忍君は工作が得意だよな。何か作ってきたら○して良いぞ」と仰った。その後「よくできました表」に並ぶ○の数はみるみる多くなっていった。劣等感を抱かずに居れた。教室でのびのび騒いでいられた。算数や国語と同等、いやそれ以上に絵や工作、つまり“表現”を評価して下さったのだ。中学高校大学と多くの先生にお世話になったが、恩師と呼べるのは小池先生ただ一人。

—恩師への感謝を画集のエッセーに認める—

小学校時代は信州の伊那、その後は逗子、東京に移り住んだが、先生は終生伊那の地を離れなかった。暑中見舞いや年賀状、それに展覧会開催の知らせは必ず送っていた。僕がどう生きているか、表現が続いているかを報告する……、先生に勝手にした約束を気随に果たしていたのだ。「忍君は好きなことを続け、まっすぐ進みなさい。」先生からの返信ハガキだ。

画集出版の話があり、編集部は作品だけでなくエッセーも掲載したいという。迷わずに小池先生のことを書いた。ご覧になった先生は大層喜ばれ上梓を祝う手紙を下された。後にTV番組レディーズ4に出演した折にも、スタジオに板絵作品はもとより、以前戴いた色紙と小池先生の所見が記載されている通信簿を持参

した。先生のことを語りたかった，自慢したかった。

—小池正巳先生との47年ぶりの邂逅—

2001年僕は岡谷市の武井武雄美術館（別名イルフ童画館）で個展をした。先生は病氣療養中と伺っていた。その小池先生が突然展示会場に姿を見せたのだ。車椅子，酸素ボンベ装着……，ガッチリした体付きだった先生は見る影も無く小さくなり痩せておられた。でも小池先生だと直ぐ分かった。病院から抜け出してきたという。懐かしい。僕は先生を車椅子ごと抱きしめた。涙が溢れ出て来て止まらない。先生も泣いている。実に47年ぶりの邂逅だ。「僕の先生は，小池先生一人です！」恩師への感謝の念噴き出し思わず絶叫。「忍君……」先生の言葉も続かない。先生は肩に手を回し首筋を撫でてくださった。“忍少年”に還った幸せな一時だった。

いく日も経たずに先生はお亡くなりになった。そしてご遺族から小包が届いた。開けて絶句，すぐ分かった，あれだ！。添えられていた手紙の文字がぼやけていく。「小池はよく言っていました。“有賀君どうしているかなあ？”と。遺品の矢立を贈ります。一番持っていてほしい方が有賀さんだと思ひまして」……。

小池先生みたいになりたい……自分の仕事を一番楽しいことのように思える人，楽しむ人。人の個性を認め，良い所を引っ張り伸ばす……生徒を出来不出来で見ず，個人個人の個性を認めて下さった小池先生……そうありがたい。これが僕の全ての出発点だ。

『こんなこいるかな』の制作コンセプトも「絵画造型表現活動」や「実践遊び学」などの指導理念も，想いの根源は同じ。僕は聖なる教室，“戦場”に入る時の気力気構えが中途半端では済まされない。誠，真剣勝負の場と心得て



小池先生が愛用された銅製の矢立（全長20cm）

いた。相模女子大学での12年間，後は無い崖っぷち意識で戦って来たつもりだ。然れども晩方飲む酒の大方は，反省自戒で苦いものだった……そんな記憶ばかり残る。小池先生には程遠い。

2018年1月